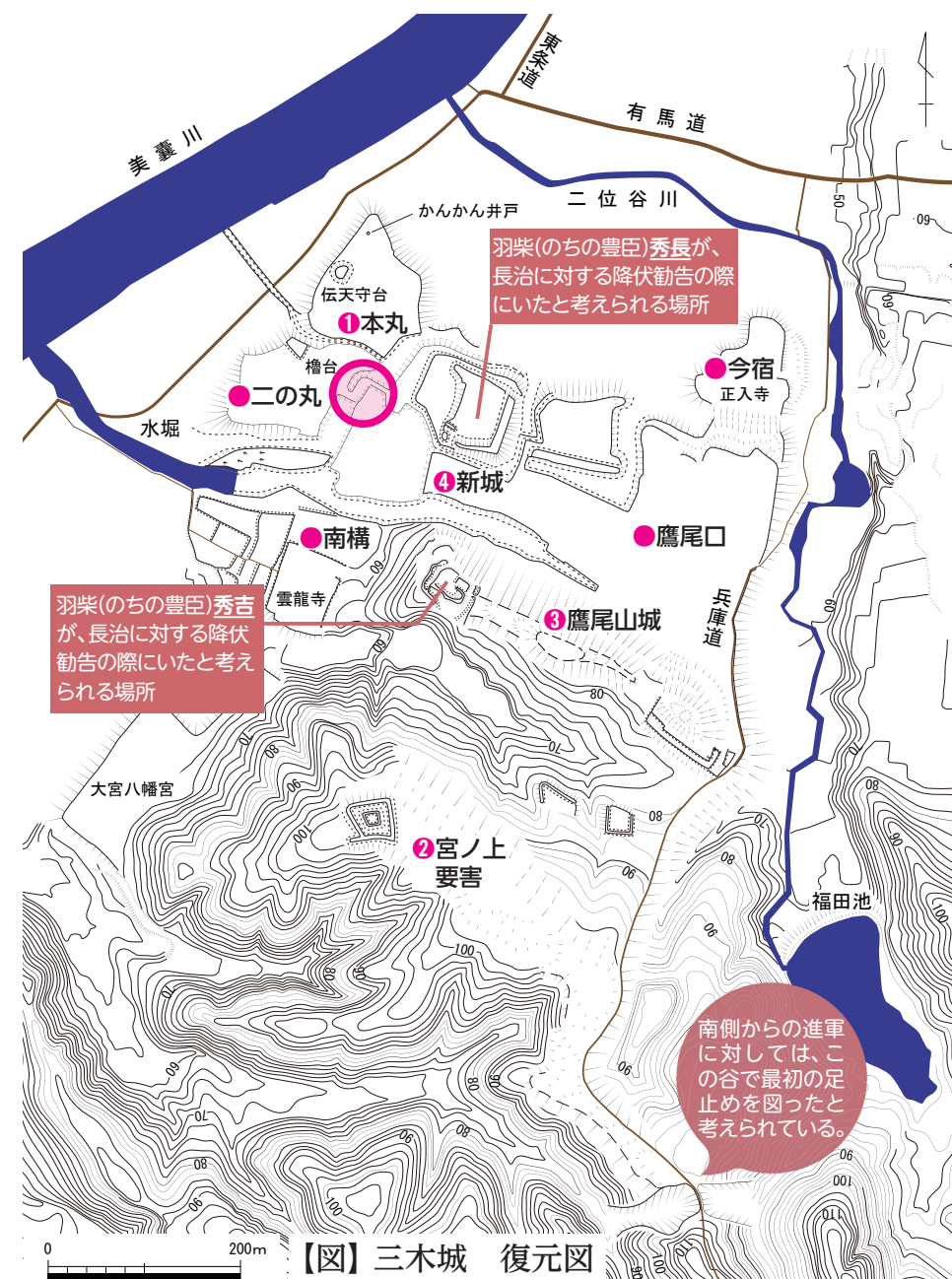


三木城跡の概要と新たに判明したポイント

三木城は、15世紀末頃に、三木別所氏の初代当主 則治によって築かれたと考えられています。
規模は東西約600m、南北約700m。城の北西側に美嚢川が流れ、背後となる南側には深い谷が入り組んだ丘陵地となっており、敵の攻撃を防ぐのに便利な場所に構えられていました。



【図】三木城 復元図

■ 東播磨の重要拠点

三木城の周囲には、5つの街道が通っており、城はこれらの街道を掌握していたとみられています。三木は播磨における京都や大阪からの入口として重要な場所であったため、三木合戦後も織田・豊臣・徳川の家臣が三木城の城主となるなど、重要な拠点として使われてきました。



■ 構造

①本丸は切り立った崖に囲まれており、標高は61m。南側には②宮ノ上要害、③鷹尾山城、④新城などがあり、地理的に移動が容易な南側から攻められた場合にこれらによって本丸を守るようになっていました。

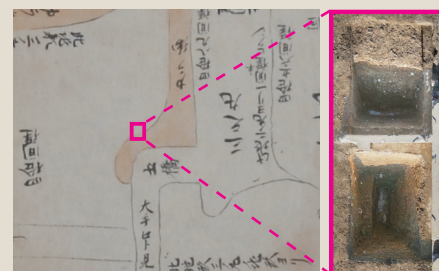


▲本丸を囲む崖。人力で登るのは困難。

■ L字型の堀(復元図上に○で表示)

2016年に市が入手した「播州三木古城図」をもとに、2022年度に発掘調査を行ったところ、二の丸の出入り口に相当する場所から深さ2.4m以上の屈曲した堀が出土。この堀は、織田信

長や豊臣秀吉によって広められた防御施設(枡形虎口もしくは、くい違い虎口)ではないかと考えられており、設置時期が三木合戦前後どちらのものかなど、さらなる調査を進めます。



▲(左)播州三木古城図(上が北)
(右)発掘調査で検出されたL字型の堀

史跡がつなぐ 過去・今・未来

問(市)みさ歴史資料館 ☎82-5060

木内内則「三木城攻付城群想像復原図」
(左に三木城、右上に秀吉本陣が描かれている。)

■ 三木合戦

三木合戦は、1578(天正6)年3月から1580(天正8)年1月までの1年10カ月におよぶ織田氏と別所氏の合戦。

羽柴(のちの豊臣)秀吉を大将とする織田軍によって三木城の周囲に付城と多重土塁からなる包囲網が形成され、「三木の干し殺し」と呼ばれる兵糧攻めが行われました。



▲三木合戦軍図(法界寺蔵)

2013(平成25)年に国史跡に指定された「三木城跡及び付城跡・土塁」は、1578(天正6)年から1580(天正8)年にかけて三木城主別所長治と織田信長との間で行われた三木合戦の舞台となった場所です。市では、2017(平成29)年度に策定した整備基本計画のもとに、三木城跡や織田軍が築いた付城跡の史跡整備を進める中で、2022(令和4)年度か

ら、三木城本丸跡・二の丸跡の発掘調査と調査報告書の作成に取り組んでいます。発掘調査の目的は、三木城跡がまちのシンボリックな存在として歴史を継承し、市民の誇りとなるよう整備を進めるためです。ここでは、三木城跡の概要やこれまでの発掘調査の成果と今後の予定について紹介します。

調査の経過と今後の展開

2026年4月~ 2026年3月	2024年	2023年	2022年	2018年3月	2013年3月
今年も発掘調査体験イベントを実施! (詳細は11月号に掲載予定)	11月~12月に2022年の調査で見つかった堀の延長部分を調査	本丸跡の発掘調査を実施したところ、多くの瓦や陶磁器などが出土	二の丸跡から深さ2.4m以上のL字状の堀を発見	「国指定史跡三木城跡及び付城跡・土塁整備基本計画」を策定	三木城跡及び付城跡・土塁が国史跡に指定